

寒中滯嶽記

野中至

(十月一日より十二月廿一日に至る八十二日間)

玄冬の候、富士山嶺の光景は、果して如何なるものなるべきや。吾人の想像以上なるべきか、之を探検し以て世に紹介せんことは、強ち無益の擧にあらざるべし、依て予は茲に寒中の登嶽を勧誘せんと欲するに臨み、先づ予が先年寒中滯嶽中の状況を敘述して、聊か参考に供する所あらんとす。既に人の知る如く、富士山嶺は木の葉一枚だになき、極めて礪礪なる土地なれば、越年八月間の準備は、頗る多端なりし。而かも平地に於ける準備と異なり、音信不通の場所なれば、若し必要品の一だも缺くることあらんか、到底之れを需むるに道なし、故に事物によりては直ちに生命に關するものあり、而かも滯在半年餘の長日月を要する胸算なりしがゆゑに、頗る注意周到なる準備を爲すにあらざれば、能く堪へ得べきに非ず。予は冬籠り後の困難は寧ろ苦とは思はざりしが、諸準備の經費の遣り繰りには、可なり頭を痛めたり、加ふるに觀測所

の構造、材料運搬の方法、採暖の装置、食料若くは被服の選擇等、多くは相談相手となるべき、経験者なき事柄のみなれば、大抵自ら考慮を回らざるべからず。殊に測器の装置、荷物の搬上する道筋の選擇等自ら踏査を要するが如き、古へより二度登るものは馬鹿とさへ言傳へられたるにも拘はらず、十數回の昇降をなし、又山頂は快晴なるも五六合邊にて風雨に遮られ、建築材料延着の爲め、山頂に滞在せる大工石工人夫等二十餘名が手を空くして徒食せるにも拘はらず、豫約の賃金は拂はざるべからず。而かも其風雨は何時晴るべき見極めも付かず、或は日光の爲に、眩暈と激烈なる頭痛とに悩まされて、石工等の倒るゝあり。又程なく落成せんと樂める前日に、暴風雨の襲來に遇ひ、數十日の日子と勞力とを費して搬び上げたる木材を噴火口内に吹き飛ばされ、剩さへ人夫等の中に、寒氣と風雨とに恐れ、爲めに物議を生じて、四面朦朧咫尺を辨ぜざるに乗じて、何時の間にか下山せしものありたるため、翌日落成すべき建築も猶ほ竣工を告ぐる能はざる等、故障續出して、心痛常に絶ゆることなかりし。斯る有様なれば、殘餘の人夫に對しては、或は呵責し、或は慰撫し、隨て勢ひ賃金を増すにあらざれば、同盟罷工を爲し兼ねまじき有様に至りたるが如き、斯る場合に於て、予も幾分か頭痛を感ずることあるも、何とも無きを假粧したり、又土用中なるにも拘はらず寒氣凜冽にして、齒の根も合はぬ程ふるも、風雨の中を縦横奔走して、指揮監督し、或る時は自ら鋏を揮ひ、又は自ら衣を剝ぬいで

人夫に與へ、力めて平氣の顔色を粧ひ居たりしも、予も均しく人間なれば、其實甚だ難義なりしなり。特に最終の登山前は、氣象臺との打合せ、又は東京より廻送すべき荷物（東京に於て特に注意して搗かしめたる白米又は家財等）皆は祖父の墓參を爲すなど、凡そ一週日計りは、殆んど晝夜忙殺の有様なりし。皆愈々最後の荷物を負ひたる十數名の強力、及び有志者と共に、強風を冒して登るや、其夜九時觀測所に着し、間もなく夜半十二時、即ち十月一日より隔時觀測を始めたり、折節天候不穩の兆ありしを以て、翌日強力等一同を下山せしめしため、予は愈俊寛も宜しくと云ふ境遇となり、全く孤獨の身となれり。是より先き小厠こかわを一人使用するの必要は無論感ずる所なりしと雖も、強て之を伴はんとすれば、非常に高き賃金を要し、又偶ま自ら進んで、越年を俱にせんことを言ひ出でたる者なきに非ずと雖も、是等は平素單に強壯と稱するのみにして、衛生上何の心懸けもなく、終日原野に出で、労働に慣れし身を以て、俄かに山巔の觀測所に閉居するに至らば、或は予よりも先きに倒るゝことなきを保せず、殊に幾分測器の取扱位は、心得あるを要するがゆゑに、遂に之を伴はざるに決したり。

然るに荷物の整理未だ其緒に就かざるを以て、觀測所の傍らの狭屋に立場もなきほど散亂したる荷物を解き、整理を急ぐと雖も、炊事を爲す暇だになければ、氣象學會より寄贈せられたる罐詰かじを嚙りて飢を凌ぎ、又寒氣次第に凜冽を加ふると雖も、器具散亂して寢具を伸ぶべき餘

地なく、且つ隔時觀測を爲しつゝあるを以て、睡眠の隙を得ず、加ふるに意外の寸隙より凜冽なる寒氣と吹雪との侵入烈しきを以て、之を防ぐに忙はしく到底睡眠せんと欲するも能くすべからず。予は時猶ほ十月初めなれば、斯くまでにあるべしとは想はざりしに、實に意想外の事のみなれば、此前途如何にあるべきかと聊か心痛せしが、茲ぞ勇を奮ふべき時ぞと奮發し、幸ひ近所合壁はなし、唯一人故障を云ふ者もなければ、夫より晝夜の嫌ひなく、鼻歌など謡ひつゝ、夜を日に繼ぎて、ガチ／＼コツ／＼と、或は棚を釣り、薪を割り、殆んど十二三日間、征衣のまゝ晝夜草鞋を解かず、又其間には屢降雪に遇ひ、爲めに風力計凝結して廻轉を止むるや、眞夜中に研るが如き寒冽なる強風を侵して暗黒裡に屋後の氷山に攀ち登り、鐵槌を以て器械に附着したる氷雪を打毀はす等、其他千種萬態なる困難辛苦を以て造化の試験を受けて稍整頓の緒に就かんとせし所に、圖らずも妻登山し來りたり。夫れより飲料に供すべき氷雪の收拾、室内の掃除、防寒具の調製、其他炊事一切の事を同人に一任し、予は専ら觀測に従事し、稍骨を休むることを得て、先づ是れ迄の造化の試験を恙なく、及第することを得たりしなり。

然るに造化は更らに銳利なる武器を以て、短刀直入し來りたり、其は他にあらず、寒氣と強風是なり。寒氣は日々嚴烈を加へ、風力亦強大に成り、岩角に觸れて怒號する音轟々として、一月中僅かに二三日を除くの外晝夜止むことなし。従て飲料に充つべき氷雪の收拾等の外出容

易ならず、加ふるに門口の戸氷結して、容易く開くこと能はず、折節十月三十日頃なりしかと覺ゆ、彼の有名なる報效義會員二人にて、強力を伴ひ、郡司氏の厚意を齎らし來訪せられし時の如き、前日は風力猛烈なりし爲め、八合目より一旦七合に引返したりと云へり。二人は山頂の光景を見て、如何に感じけん、予に向ひて、焉んぞ是千島の比ひならんや、君は如何にして越年を遂げんとするか、前途憂慮に堪へずと曰はれたり。十月末の光景を見て、既に此言あり、進んで十二月に入りては、實に平地に在りて想像の及はざるものあり、斯の如き有様なるを以て、重要な外は外出を爲さず是れ却て健康を害するの恐れあればなり。(外出の難かるべきは豫期せる所なりしを以て、運動に供せんため自ら室内操櫓器と名くる者を携へ行きたりしが室内狭くして屢之を用ゆること能はざりし)故に僅かに狭少なる^ま牖によりて下界を瞰下し、常に山頂の風力の強暴なるに似ず、日光の朗らかなるを見て、時として妻などは若し空氣が目に見ゆるものならば、此烈しき風を世人に見せたし、下界の人は山頂も均しく長閑ならんと思ふなるべし、彼の三保の松原に羽衣を落して飛行の術を失ひし天人は、空行く雁を見て天上を羨みしに引きかへ、我に飛行の術あらば、暫しなりとも下界に下りて暖かさうな日の光に浴したしなど戯むれを云ひしことありたり、實に山頂は風常に強くして、殆んど寧日なかりしなり。然れども諸般の事稍整理して、幾分安堵の思ひをなし、室内に閑居するに至るや、予が意氣豪な

らざる故と云はんか、將た人情の免れざる所ならんか、今までは暇なくて絶えて心に浮ばざりし事も、夜半觀測の間合などには煖爐に向ひながら、舊里に預け置きたる三歳の小兒が事など始めて想ひ起せし事もありたり。

斯の如くにして、稍堵に安んぜんとするを、造化は猶ほ生意氣なりと思ひしか、將た又更に予を試みんとてか、今回は趣向を變へて、極めて陰險なる手段を用ひジリ／＼靜かに攻め來りたり。其は他に非ず、氣壓の薄弱是れなり、人の知る如く、平地の氣壓は大抵七百六七十耗前後なるに、山頂は四百六十耗前後にして、實に三百耗の差あり勿論夏期とても猶ほ同様なりと雖も、寒氣増進するに及びては、益低落の傾きあり。故に靜座するも猶ほ胸部の壓迫を覺へ、思はず溜息を吐くことあり、況んや勞働するに於ては、呼吸益^{ますく}逼迫するを覺ゆ。而かも先きの攻め道具たりし寒氣と風力とは、益猛烈を加ふるのみにして、更に其勢を減ずることなし、剩さへ強猛なる寒氣は絶えず山腹の積雪を遠慮會釋なく逆しまに吹上げ來り、所謂吹雪なるものにして、觀測所の光景は恰かも火事場に焼け残りたる土藏の、白煙の中に包まれたるに似たり。故に一天拭ふが如く快晴なるも、雪は常に降れるに異ならず、實に平壤の清兵^{しん}も宜しくと云ふ有様にて、四面包圍を受けしなり。爲めに運動意の如くならず、隨て消化力減少して食氣更に振はざるを以て、食物總て不味にして口に入らず、凡そ食事の如きは普通斯る場所に於け

る娛樂の一とする所なるに、今は殆んど之をしも奪ひ去られたれば、餘す所は觀測時に測器に示す所の諸般の現象を検して、以て無上の樂みとするの一事あるのみ。實に造化の作戰計畫は、恰かも眞綿を以て首を締むるが如き手段なりしなり。而かも予等は屈せずして、之れに堪へつありしに、茲に又二個の憂ふべき事併發し來りたり。他にあらず、電池の破壊と風力計の破壊の爲に、爾來風力を測る能はざるに至りし事、及び妻の浮腫病是れなり。而して此病や、實に是れ味方敗北の主因となるに至りしこと、後に至り大に思ひ當りたるなり。

濕球寒暖計は、夙に測る能はざるに至り、大に樂みを殺がれし心地せしが、今又煖爐の傍に置ける電池凝結して破壊し、爲めに發電するに由なく、又風雨計の要部を蔽ふ所の硝子板粉碎して、内部に冰雪填充し全く其用を爲さざるに至りしかば、更に大に樂みを殺がれたり。

初め予が種々の事情により、單身越年を爲さんと決するや、妻之を憂ひ獨り密かに急行、小兒を郷里の父母に托して登山し來るに就きては、幾分心を勞することもあるなるべし、其結果妻は十一月上旬に至り、甚く逆上し、爲に平素往々患ふる所の、扁桃腺炎を誘發し、體溫上昇し咽喉腫れ塞がりて、湯水も通ずること能はず、病褥に吟呻すること旬餘日、僅かに手療治位にて幸に平癒せんとしつゝありしが、造化は今の體の弱みに乗じたるものならんか、所謂富士山頂の特有とも稱すべき、浮腫に冒され、全身次第に腫れて殆んど別人を見るが如き形相とな

りたり。此の浮腫と云ふことは、山頂に於て多少免るゝ能はざるものなることを、後にこそ知るを得たるなれ、當時は初めてにして、特に醫業の門外漢たる予等には、猶更其原因を極むるに由なく、少からず心を痛めたり。固より其邊の用意は一通り爲したりしも、斯る病魔に襲はれんとは、全く思ひ寄らざることなれば、僅かに下劑を用ゐなどして、一向ひたすら恢復を祈りしも、浮腫容易に減退するに至らず。然るに如何せん、之を平地に報ずる道なく、さればとて猛烈なる吹雪の中を下らんことは、到底一二人の力を以て爲し得べきにあらず。又之を下山せしめんことは無論當人の本意に非ざるべしなど、之を患者に語ることの、病に障りあらんを思ひ、獨り自ら憂慮に沈みたりしが、固と是れ無人の境、或は斯計りのことあらんは、豫め期したることなるにと思ひ返し、よし／＼萬一運拙くして斃れなば飲料用の氷桶になりと死骸を入れ置くべしなど、今より是れを願ねがへば笑止に堪へずと雖も、當時は斯る事も心に期したることありき。然るに如何なる幸運にか、十一月下旬に至り、浮腫目を追ふて減退し、十二月の初には、不思議にも全く常體に復し、前日の如く忠實に彼れが負擔の業務を執り得るに至りたり。是に於て室内も、自ら陽氣となり、始めて愁眉を開くことを得、予が看護中の心事など、打語りつゝありしこと、僅かに二三日にして又々大に憂ふべきこと出で來りたり。他にあらず予も亦浮腫に冒されたること是れなり。

予が漸次浮腫を來すや、均しく體溫上昇し、十二月は實に病の花盛りなりしが如し。然れども足を引摺りながらも、隔時の觀測丈けは缺くことなかりしが、予の浮腫も全く妻のと同質なりと推定したれば、己に幾分經驗あるを以て、今回は敢て驚くことなかりしと雖も、漸次病勢を増すに及びては、妻も亦予が彼れを看護せし時と同様の心事を繰り返しつゝありたるもの如し。折節圖らずも山麓有志者の、寒中數回登山を企て、而かも一行數人の内、倔强なるもの僅かに二人のみ萬艱を排して始めて其目的を達して來訪せられしに遇ひしかば、予は其當時の病狀を決して他に告ぐるなからんことを誓ひ置しに、何時しか其筋の耳にまでも入る所となりしなり。蓋し予の浮腫は登山前より、多少の疲勞に乗じて妻のよりも幾分重かりしならん、來訪者の一行中には予が舍弟も加はりし由なれども、他二三人と共に猛烈なる吹雪に遮られ或は依頼品を吹飛ばさるゝ等、僅かに必要の文書類を、倔强なる二人に依頼して持ち行かしめ、他は皆な八合目の石室に止まりたりしも如何にも残念なりとて、一人を追蹠銀明水の側まで來りしに、吹雪一層烈しく、大に悩み居る折柄、二人は予等に面會を了りて下るに遇ひ、切りに危険なる由を手眞似して引返すべきことを促せしかば、遂に望みを達し得ざるのみならず、舍弟は四肢凍傷に罹り、爪皆剝落して久しく之に悩み、後ち大學の通學に、車に頼りたる程なりしと云ふ。

夫より程なく、予が實に忘るゝ能はざる明治二十八年十二月二十一日は來りぬ。和田中央氣象臺技師、筑紫警部、平岡巡查等は倔強の強力を引率し、一行十二人注意周到なる準備を爲して、登山し來られたり。抑も下山は予に於て實に重大の關係あるが故に、差當り斯病を醫すべき適切なる藥餌を得、猶ほ引續き滯嶽して加養せんことを懇請したれども、聽かれざりしかば、再舉の保證として大に冀望する所あり、且つ斯事業の遠大を期するものなることを慮ひ、遂に一旦下山に決したり。是に於て予は遂に造化の陰險なる手段に敵すること能はずして、全く失敗に歸したるなり。是れに就きても予は是れ迄の實驗上、益氣象の人世に最大關係あることを確認するを得たり。内地に於ける各種の企業者にして、而かも平地に於てすら、往々身體の健康を傷そこなひて失敗するものあり、矧はんや海の内外土地の開未開を問はず、其の故郷を離れて遠く移住せんと欲するもの、若くは大に業を海外に營まんと欲するものゝ如きは、先づ其地の氣象を調査すること最大要務なりとす。従て平素より氣象なるものに注意し、是れが觀念を養ふを要す。然らざれば或は失敗に歸するに至るべきなり、豈に戒めざるべけんや。

予は是に於て終に十年來の素志を達する能はずして、下山の止むべからざるに至りたれば、俯甲斐なくも一行に扶けられて、吹雪の中を下山せり。胸突を過ぎし頃日は既に西山に傾きしかば寒氣一層甚しく、性來壯健なりとは云へ、從來身心を勞し、特に病體を氷點下二十餘度に

及べる寒風の中に曝せしことなれば、如何でか之れに堪ゆるを得んや、最早寒風に抵抗して呼吸するの力なく、特に浮腫せる胸部を強力の背に壓迫せし故、呼吸益苦しく、空を攫みて煩悶するに至れり。今は刻一刻、氣力次第に弱はり、兩眼自ら見えなくなりたれば我今是れまでと思ひて、自ら眼を閉ぢなば或は是限なるべし、力の續かんまではと心勵まし、齒がみをなし、一生懸命吹雪に向ひて見張りしたため、兩眼殆んど凍傷に罹りたるか、色朱の如く、又足は氷雪の上を引摺りしたため、全く凍傷に罹る等實に散々の體に打ち惱まされ、茲に氣力全く盡き果て、終に何時となく、人事不省に陥りたり。斯の如き際に、普通起るべき感情は、予も強ち世捨人ならねば、大は世界及び國家の事より、小は一家及び我が子の事までもむら／＼と思ひ起さざるにはあらねども、男子の本領として屑よく放棄したり。

既に夜半過ぎなりしかと覺えし頃、漸く人心地に立ち還りぬ。聞けば予が苦しさの餘りに、仙臺萩の殿様が御膳を戀しく思ひしよりも、猶ほ待ち焦れし八合目の石室の爐邊に昇ぎ据ゑられ、一行は種々の手段を施こし、夜を徹して予が病軀を暖ためつゝある眞最中なりしなり。偕予は我に還るや、俄かに又呼吸の逼迫、凍傷の難み、眼球の激痛等を覺えたり、勿論未だ眼を開くこと能はざるのみならず、痛みに堪へかねて、眼球を轉ずることさへ叶はず、實に四苦八苦の責めに遇ひしも、固と捨てたりし命を圖らずも拾ひしに、予に於て毫も憂ふるに足らず、

たゞく以上述ぶる所の場合に、終始一行の骨折心配は、如何計りなりしぞ、實に予が秃筆の書き盡し得べき所に非ず、願くは有志の士は自ら寒中登嶽して其勞を察せられんことを。

予は實に此經驗によりて、造化の執拗にして益氣象の畏るべきものなることを知ると共に、山頂と山下との總ての氣候は、所謂霄壤の差異あることを認め得たり。下山の途中既に五合目邊に下れば、胸部自ら透きて、心神爽快を覚え、浮腫知らず識らず、減退して殆んど常體に復し、全く山麓に達するに及びては、所謂形容枯槁の人となり、餘人は寒氣耐へ難しと云ひ合へるにも拘はらず、予等は左程に寒氣を感じず、又今まで食氣更に振はざりしに引かへ忽ち食慾を奮起し、滯嶽中に比すれば無論多食せしと雖も、更に胃を傷ふことなかりし。之によりて見るに、滯嶽中食氣振はざりしは、強ち直接に胃の衰弱せし爲めのみならずして、山頂と寒氣左程違なき五合目邊に於て、已に爽快を覺ゆるを以て考ふれば、其身體に異常を感ずるものは、唯氣壓の點あるのみ、勿論運動又は沐浴の不如意等も、大に媒助する所ありしには相違なきも主として氣壓薄弱の然らしむる所ならんか、暫く疑を存す。若し予にして羸弱にして、體育の素養なからんには、人事不省に陥りたる後ち、再び起つこと能はざりしならんにと、下山後醫師の言を耳にしたることもありたれども、要するに予が幸に今日あるを得たるは、偏へに有志者の特別の援助を與へられたるに依る。

予は斯の如く、屢思はざる逆境に臨みし代りに、再學の計畫に就きては、經驗を得たること鮮少ならず。特に先づ須要にして急務となすものは、觀測所改造の舉に在り、是れをして完全ならしめざれば常に天候に妨げられ、到底力を目的の業務に専らにすること能はず、隨て満足なる觀測の結果を得んことを望むべからず。故に完全なる家屋改造のことは、實に斯事業の根柢なりとす。然るに先年は諸事完備を缺くこと多かりしにも拘はらず、寒中殆んど其半ば滞在し得たるのみならず、圖らずも婦女子の弱體すら猶ほ之れに堪へ得たる有様なるを以て、今若し前途の施設を完備せんには、常住觀測の決して至難の業にあらざるは予の確信する所なり。而して、其家屋構造の如きは、予大に經驗し得たる所あり、依て茲に新たに計畫を立て、在來の觀測所に比すれば總て其規模を擴張し、先づ室内に運動所を設け、且つ經驗上得たる所により、寒中出入の便を圖り、總て構造を精密にして、固く寒風と氷雪との浸入を防ぎ、浴室を設け、又採暖法を攻究し、通信の道を開き、又少なくとも三名以上の技手滞在し、山麓及び七合目に寒中是等技手を交代させ、時の避難所を設け、或は夏期中より引續き滞嶽して身體を山頂の風土に馴らし、以て病を未然に防ぎて、身體の安固を圖り、或は測器の故障を防ぐの法を立つる等、其他經驗し得たる所により、夫れ々防禦の策を講じ、以て安全の道を圖らんと欲し、下山後苦心經營すること一日に非ずと雖も、在來の觀測所に比すれば、規模迥かに宏大を要す

るが故に、其の改築費及び將來の維持費の如き、一私の資力を以てせんこと容易に非ず、則ち今回富士觀象會なるものを組織して弘く天下に向て賛助を乞ふに至れり。

編者註。明治二十八年の秋から冬にかけて八十二日間、野中至氏が富士山頂に私設觀測所を設けて氣象觀測に従事された事は、當時劃期的な出來事として世間の耳目を聳動せしめた。いかに絶大な困難と戦ひつつ、氏がその志を遂げられようとしたかは、本文に委しい。明治二十八年と云へば、わが登山界に、「冬山」といふ概念はおろか、漸く志賀重昂の「日本風景論」が出て登山の風潮が起りかけたばかりの頃である。富士の山頂で冬を過さうなどは、人々の夢想だにし得ない事であつた。それを敢てしたこの果敢な先蹤者の堅忍不拔の精神と勇猛心に、我々は頭を下げずには居られない。しかも氏の仕事は後年の高山氣象觀測の基を爲した事を思へば、學界の貢獻者としても、その名は永く銘記さるべきであらう。

こゝに掲げたのはその八十二日間の滯頂記であるが、その滯頂を決意されるまでに、氏は二回の冬期登山をして居られる。(勿論これが富士冬期登山の最初の記録である。)その第一回は明治二十八年(一八九五年)一月の初めで、御殿場から寒氣を犯して登つたが、登山用具不備のため五合目から引返された。第二回は同年二月やはり御殿場から、獨創的な登山杖や登山靴鉾の使用によつて、遂に頂上に達せられた。いづれも單獨の登山であつた。

ついで同年五月、觀測所建築準備のため登頂され、確固たる自信を得て、同年八月愈々建築に着手された。この建築にも幾多の困難が伴なつたが、月末には漸く工事が終つた。そして十月一日からその山

頂の不完全な小屋に立籠つて觀測に従事され始めたことは、本文にある通りである。

以上の體験を記して野中至氏は「富士案内」(明治三十四年、春陽堂)といふ本を出された。本文はその中から採つたものである。當時氏の此の果敢な行爲が如何に社會にセンセーションを起したかは、福島少佐のシベリア横斷、郡司大尉の千島探検と共に、新興日本の氣概を示すものとして遠く海外に喧傳せられ、又、伊井谷峰が市村座でこれを劇化上演した事によつても知られる。

高嶺の雪

明治二十八年の暮に野中至氏が令夫人千代子女史と共に、富士山劍ヶ峰にて越年を企て、兼て氣象觀測を爲されたが、不幸にして病氣に罹られ、年内に下山の止むなきに至つたのは、甚だ有名なことである。翌年九月に落合直文先生は此の壯舉を描きて、「高嶺の雪」と云ふ冊子を明治書院から刊行された。

その巻頭に和田雄治先生が同月落合先生に寄せた手紙が載せてある、「拜啓仕候然は今度明治書院より發行相成候貴著「高嶺の雪」拜讀仕候處右は至極結構の御本にて、野中至氏の當初より苦心の情況明細に相分り壯年者などに一讀爲願候は、同氏の國家の爲め將學問の爲め一身を犠牲に供したる義心の程相知れ洵に良き手本に可相成と窃に喜居候儀に御座候貴著愛讀者の多き遂には第二、第三の野中陸續と現出せむこと切に希望仕候敬具」とある。第一野中の後に約三十五年も経つてから佐藤順一氏が第二の野中となつて現はれた、然るに第三や第四、第五……の野中は、我が測候技術官養成所出身の若手の氣象學者が續々と之を承つて、イヤ早多くて困る位に輩出して仕舞つた、和田先生が存命して居られたらサゾ喜ばれることであらう。(岡田武松著「測候瑣談」より)